

令和八年度

龍谷大学付属

平安中学校入学試験問題

受験番号

国語

解答上の注意

- 一. この問題用紙は「はじめ」の合図があるまで開いてはいけません。
- 二. 答えはすべて解答用紙の決められたところに書きなさい。
- 三. 解答用紙の決められたところに受験番号を書きなさい。氏名を書いてはいけません。
- 四. 問題を読むときに、声を出してはいけません。
- 五. 問題内容についての質問は受けません。
- 六. 印刷が読みにくいときは手をあげて監督者を呼びなさい。
- 七. 「やめ」の合図があつたら、解答用紙をおもてに向け、問題用紙を解答用紙の上に置いて、回収が終わるまで席を離れてはいけません。(問題を持ち帰ることができません)

[illegible]

問題は次のページから始まります。

□ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

みなさんは「お刺身^{さしみ}」は好きですか？ 好きな人は「刺身」と聞いただけで生ツバがわいてくるかもしれないね。でも、「刺身」の好きな人に「死んだ魚は好きですか？」ときいたら、おそらく、ほとんどの人が「好きです」とは言わないと思います。

これって、おかしくありませんか？

「刺身」と「死んだ魚」は表現の仕方は違^{ちが}っても同じもののはずです。なのに「刺身」と聞くと人は食欲をそそられ、「死んだ魚」と言われると食欲がなくなってしまう。「**I**」はうまそうなのに、「死んだばかりの魚」と言いかえると、人は食欲が失^うせるばかりか、魚がかわいそうになったり、なんとなく不衛生な感じがしたりする。

「今日の晩ごはんは、お刺身の盛り合わせよ」とお母さんに言われたら、

「おっ、豪勢^{ごうせい}だな。そうか、パパのお給料が出たんだ」と嬉^{うれ}しくなるでしょう。ところが、

「今日の晩ごはんは、死んだ魚だよ」

と言われたら、どこかとても汚^{きた}い川で拾ってきた魚を食べさせられるような気持ちになって、

「いったい、いつからウチはそんなにびんぼうになったんだよオ」

とガックリしてしまいました。

① どうして、言葉ひとつでこんなに感じ方が違ってしまおうのでしょうか？

似たような例を挙げてみましょう。

肉料理をおいしく感じさせる言葉のひとつに「肉汁^{にくじゅう}」があります。

料理番組では、できたてのハンバーグなどにナイフを入れ、あふれ出る肉汁をアップで撮^とるのが定番になっていますね。グルメレポーターがここぞとばかり、

「この肉汁はジューシーを通り越^こして、ジューゴ、ジューロクやあ!!」

と叫^{きけ}ぶ場面もあります。

でも、肉のうまさの代名詞のようになっている「肉汁」。これは、実は牛や豚^{ぶた}の体液、※リンパ液のはずです。

体の外に出るときは汗^{あせ}になり、それが乾^{かわ}くと垢^{あか}になっちゃうものなんです。そんなものをみなさん食べたいですか？ 「ハンバーグからあふれ出たリンパ液」と聞いて、うまそうだと思いますか？ 思わないでしょう。でも、それが「肉汁」という言葉に変わると、とたんにうまそうになってしまふんです。

これはどういうことなのか？

実はぼくたちは「刺身」そのものを食べているのではありません。

② 「刺身」という「言葉」を食べているのです。あるいは「肉汁」そのものをうまいと思^{おも}っているわけではなく、「肉汁」という「言葉」を聞いて、うまいと感じている、ということなのです。

では、みなさんは③「言葉」を使って何をしていますか？

何をしているかは、みなさんの毎日の生活を振り返ってみれば、すぐわかりますね。

「もう起きないと学校に遅^{おく}れるわよっ!」

とお母さんにたたき起こされ、

「やべえっ、遅^ち刻^{こく}だ! いってきまーす」

と家を飛び出し、**■**通学途中^{とうちゅう}で出会った友だちとおしゃべりしながら学校に到着^{とうちやく}。授業になれば、先生の言うことに耳^{みみ}を傾^{かたむ}け、あるいは、教科書に挟^{はさ}んだコミックをこっそり読みふけり、

ときには居眠りをして過ごし、休み時間になるとまた友だちとおしゃべりに興じ、家に帰ったらメールをしたり、テレビを見たり、家族としやべったり、【受験勉強に精を出したり――。おそらく、そんな毎日を送っているはずです。

A、みなさんは「言葉」というものを、たいていは会話に使っているんです。自分の気持ちを「言葉」で家族や友人や先生に伝え、同じように相手の言うことを「言葉」で理解しています。

そこには必ず、みなさんの言葉を伝える相手があります。声を出さないメールにしても相手がいるから打つのだし、教科書や受験雑誌やコミックを読むにしてもIIという、情報を伝える側と受け取る側という相互の関係が成り立っています。

人にものを伝え、人からものを伝えてもらう。それは「言葉」の持つとても大切な役割です。でも、「言葉」には④その手前に、もうひとつ大切な役割があるんですね。まず、そのことからお話ししましょう。

B、ぼくたちは話しかける相手がいないのに、言葉をしやべっているということが、けつこうあると思いませんか。寝言などはそれにあたります。夜中、夢の中で大声を出して、自分の声に驚いて目が覚めた経験のある人はわりといるんじゃないでしょうか。

独り言というのもありますね。家を出る寸前になって定期券が見つからず、「あれ？ ない！ ない！ いったい、どこいったんだろ？」なんて、思わず声を出しながら捜したりするのとってありませんか？

C、小さい子どもというのは、よく一人で何かしやべっています。みなさんは『はじめてのおつかい』という人気テレビ番組を見たことがありますか。お母さんの言いわけで、幼い子どもが買い物に出かけるといふ番組です。あれを見ると、子

どもは買い物の行き帰りで、しょっちゅうしやべっています。「よしよ、よしよ」

と歩きながらかけ声をかけ、通りを犬が横切ると、

「あつ、犬だ！」

と言いながら立ち止まり、買い物袋を提げた帰りの途中には、

「もお、つかれちゃったよお」

誰に伝えるわけでもないのに、子どもは一生懸命しやべり続けています。

カラオケはどうでしょう。カラオケが好きな人というのは、自分が歌いたくてたまらない。だから、他人が歌っているときは、次に歌う自分の曲を探すのに忙しくて、まるで人の歌を聴いていないことが多いんです。仲間同士、一緒の場所で歌っているのに、お互いの歌声に無関心だというのは、声を出してはいても、相手に何も伝えていないのと同じではないでしょうか。

D、どうしてぼくたちは話す相手がおらず、誰かに伝える気もないのに、こんなにしばしば言葉を口にしてしまうのでしょうか。

それは、ぼくたち人間が「言葉」で考え、「言葉」で感じているからなんです。

外を歩いていて犬を見かけたら、ぼくたちは「あつ、犬だ」と思います。ただし、それは心の中でそう思うので、口に出しては言いません。でも、幼い子どもは思ったことを「あつ、犬だ」とすぐ口にする。⑤それだけの違いなのです。

人間は熱いものに触れたり、痛みを感じたりすると、「あつっ！」とか「いたっ！」とか、とっさに言葉が口について出る。いや、声にせずにはいられない。それは、ぼくらが温度や痛みというものを「言葉」で感じているからです。

言葉で考え、言葉で感じているとはどういうことか。簡単な例を挙げましょう。

今、ぼくが花のいけてある一輪挿しいちりんざしを手にとつて、みなさんに「これは何ですか？」ときいたとします。

おそらく、百人中百人近くのみなさんが、

「それは花です」

と答えるはずで。

でも、よく見れば一輪挿しなのだから、花をいけてある花瓶かびんもあるし、花には茎くきもあり、葉はっぱもある。なのに誰も「それは花瓶です」とも「葉っぱです」とも言わないんですね。それは、みなさんが目に映った一輪挿しから、もつとも目立つ花びらの部分ぶんぶんを選せん択して、「それは花です」と答えているからです。つまり、みなさんは一輪挿しを見た瞬間しゆんかんに、それを「花」という言葉に置き換かえて考えているのです。

なんだから、当たり前のことを言っているように思われるかもしれませぬ。でも、これはとても重要なことなんです。

というのは、ぼくたち人間は、たとえ同じものを見ていても、それをどう言葉で表現するかによつて、そのものに対する考え方、感じ方がまるで違つてしまうからです。

いわば、言葉はそのものを包みこむ※オブラートオブラートみたいなものと言つてもいい。だから、その包み方次第しだいで、そのものが、さっきの「お刺身」と「死んだ魚」のようにおいしくもなればマズくもなつてしまいます。

(金田一秀穂 『15歳の日本語上達法』)

※(文中のことばの意味)

リンパ液 … 体の各部に栄養分を運んだり、いらなくなつたものを運び出したたりするはたらきをする無色の液体。

オブラート … 相手を刺激しげきしないよう遠回しに表現する意。

問 1

A D にあてはまることばの組み合わせとして、最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- | | | | | |
|---|-------|--------|--------|--------|
| ア | A つまり | B たとえば | C それから | D では |
| イ | A そして | B しかし | C つまり | D ついに |
| ウ | A つまり | B だから | C たとえば | D さらに |
| エ | A でも | B それに | C さらに | D たとえば |

問 2

I II にあてはまることばとして、最もふさわしいものを次の中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

- | | | | | |
|----|---|---------------------------|---|-----------------------------|
| I | ア | 最高級の刺身 | イ | 珍しい魚の刺身 |
| | ウ | 活 <small>い</small> きのいい刺身 | エ | 脂 <small>あぶら</small> ののった刺身 |
| II | ア | 作者と読者 | イ | 書物と人間 |
| | ウ | 書店と学生 | エ | 相手と自分 |

問 3

——線①「言葉ひとつ」とありますが、同じ意味内容をあらわすことばを文中から五字以内でぬき出しなさい。

問 4

——線②『肉汁』そのものをうまいと思っ
てではなく、『肉汁』という『言葉』を聞いて、うまいと
感じている」とありますが、どういうことですか。最もふ
さわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 肉汁そのものはまずいものであるのに、「肉汁」と聞く
とうまいように勘違いしてしまうこと。

イ リンパ液と「肉汁」とを比べてみたとき、「肉汁」のほ
うがリンパ液よりはうまいように思えること。

ウ 「肉汁」という言葉の持つ響きやイメージによつて、リ
ンパ液であるものをうまいと感じること。

エ リンパ液であることを信じないようにして、無理に「肉
汁」と呼ぶことでうまいと感じること。

問 5

——線③『言葉』を使つて何をしていますか？」と
ありますが、筆者は何のために「言葉」を使っていると述
べていますか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、
記号で答えなさい。

ア 相手に自分の気持ちを伝え、自分をよく理解してもらう
ため。

イ 人にものを伝えたり、人からものを伝えてもらったりす
るため。

ウ 相手に自分の気持ちを伝え、相手の毎日の生活を理解す
るため。

エ 周囲の人々の言うことに耳を傾け、毎日の生活を記憶す
るため。

問 6

文中の【 】の部分から、「言葉」と関係のない例を
一つ見つけ出し、十五字以内でぬき出しなさい。

問 7

——線④「その手前」の「その」がさす内容について
説明した次の文の A C にあてはまることばを文
中からそれぞれ指定された字数でぬき出しなさい。

A (三字) や B (二字) を伝え合う
C (五字) を築くこと。

問 8

——線⑤「それだけの違いなのです」とありますが、
声に出すかどうかの違いを筆者が「それだけ」と言ってい
るのはなぜですか。その理由を説明した次の文の に
あてはまることばを文中から二十字以内でぬき出しなさい。

人間は誰でも ことには変わりがないから。

問9 本文の内容としてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「刺身」と聞くとおいしく感じるのに「死んだばかりの魚」と聞くと食欲が失せるのは、「死んだばかりの魚」という表現では新鮮さが感じられないからである。

イ 「ハンバーグからあふれ出たリンパ液」と聞いても全然うまそうだと思えないのは、この言葉を聞いた瞬間に、誰もが牛や豚の汗や垢を想像してしまうからである。

ウ 「会話」はおたがいに言葉を使うことで気持ちを伝え合う行為であるのに対して、「独り言」は自分自身へ向けて言葉を伝える行為である。

エ 熱いものに触れたり痛みを感じたりした時、「あつっ！」とか「いたっ！」という声をとっさに発してしまうのは、人間が温度や痛みを言葉で感じているからである。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

主人公の「アイ」は小学6年生の女の子。父は単身赴任、母も仕事で夜遅くまで働いており、いつも一人で夜遅くまで留守番をしている。

お母さんは家でもパソコンに向かっていている。食品会社の広報の偉い人になってからはいつもこうだ。帰ってきてからもずっと仕事をしている。

おやすみなさいと言うと、お母さんは両手を広げた。腕の中に吸い込まれるように入っていくと強く抱きしめ、おやすみと言ってくれる。この時が日常で一番お母さんに子供として見てもらえている気がしてわたしは嬉しかった。

次の日は、学級委員やいろいろな委員、掃除当番の順を決めることに午前中が使われ、①わたしは早く授業が始まって宿題が出ればいいのにと思っていた。

それを休み時間にエリサに話すと、アイは勉強が好きだねえと茶化された。家でやるのが一つできるからと言うと、アイは一人で何してるのと聞かれた。

「宿題したり、テレビ見たりしてるくらいかな」

「わたしはゲームしてばかりでいつもお母さんに怒られてるよ」

わたしもゲームがあればこの埋まりきらない寂しさをどうにかできるだろうか。

「あとは自分のアルバムを見返してる」

アルバム？ と聞き返してきたエリサにわたしは何度も背いた。

「小さい頃からの写真を見返して、懐かしいなーって思ってる」「親って写真撮るの好きだよ。ねえ、うちの玄関に写真飾った。」

てあるの覚えてる？」

エリサの家の玄関にはたくさん写真立てが置かれている。確かにエリサのお母さんは写真を撮るのが好きで、私たちが遊んだり宿題をしている姿も記念にと言ってカメラを構えていた。それを思い出しながらわたしは肯いた。

「その中に家族写真もあるんだけどさ、毎年お兄ちゃんも、わたしもうんざりしてる」

「どうして？」

「だってきちんと服着て写真屋さんに連れてかれて、無理やり笑ってーなんて言われるから、どの写真も顔が引きつってるの。こーんな感じで」

エリサは表情を硬直させて※戯けてみせた。口は横に広げ、目は細く糸のようにしている。あまりの変な顔にわたしはお腹を抱えて笑った。

「あんな顔が写真として残るなんて最悪だよ」

「今度遊びに行った時に見てみるよ」

絶対やめてーと、エリサがわたしに後ろから覆いかぶさり脇腹をくすぐるから、今度は涙が出るくらい笑った。

「うちもね、お父さんが単身赴任するまでは毎年撮ってたの。家の前の桜の下で。でもお父さんもないし、お母さんも忙しくてもう撮らなくなっちゃったんだ」

ひとしきり笑いおわって指先で滲んだ涙を拭いながらそう言うのと、思い出と共に寂しさがこみ上げてきて最後の方は少し湿っぽくなってしまった。

アルバムの中には毎年一枚ずつ家族写真があった。最後に撮った桜の下のおわたしはぐずってとんでもなくブサイクな顔をしていた。それは三年生の春、確かお父さんが単身赴任で家を出ていく日に撮ったものだった。寂しくて寂しくてわたしはずっと泣いていた。

「そっかー」

「また同じように撮れたらいいんだけど、難しいかな」

② 自分の底から湧き上がってくる感情に無理やり蓋をするようにヘラツと笑ってみると、おでこにパチンと弾けるような痛みが走った。イタツと手で覆うと、目の前のエリサが口をへの字にしてこちらを見ていた。

「アイはそうやってすぐ我慢するところあるよね」

ヘツと間のぬけた声を出すと、今度は両頬をぱしんと挟まれた。唇が自然と前に突き出して、今わたしはすごくブサイクな顔をしている気がする。

「忙しいって言っても、写真を一緒に撮れないほど忙しいわけじゃないでしょ？ 今なんてスマートフォンでパシャツで終わるじゃん。一緒に写真撮ってもらったら？」

「でもお父さんは福岡だし。お母さん帰ってくるの遅いし、休みも不定期だからみんなで写真なんて無理だよ」

「もー！ もっとわがまま言えればいいじゃん。いつも我慢してばかりだから写真撮ってくらいのお願い聞いてもらわなきゃ。三人じゃなくて、二人でだって立派な思い出だよ」

でしょ？ と首を傾げるエリサの眼差しは真剣で、③ わたしはゆっくりとひと肯いた。

帰り道、エリサと別れた後にいつもの桜並木を歩いた。恒例行事だった家族写真がなくなっただけで、わたしはこの道を歩いて桜を見ると、苦い気持ちにならずにはいられなかった。

たつぷりとした花達が木々に咲き始めると、楽しくて満たされた、あの頃の自分の姿をどこかに探してしまう。けれど今は歩く度に靴底に花びらがまとわりつくのを煩わしいと思ってしまう。

あの頃は可愛いピンク色が好きで、小さな花びらが五つ寄り集まってできた一つのお花が風にさらわれて舞う姿は、紙吹雪

みたいだと思った。枝の間から木漏れ日がスポットライトになり、スカートをはいで立っているだけで特別な女の子になった気分がした。手を繋いだ両親は笑っていて、もっとわたしを笑わせるために、お父さんはセルフタイマーのシャッターを押してこちらに向かって走ってくる時、わざと変な顔をしていた。だから二年生までのわたしは、この道でいつも大きな口を開けて豪快に笑っていたはずなのに。

その日の夜、お腹の空いたわたしは棚の中にあつたカップ麺を食べて先に食事を済ませた。ローテーブルの上にアルバムを置いてお母さんの帰りをじつと待った。

十時を過ぎてもお母さんは帰ってこず、待ちきれず携帯に電話をかけるのもう少しだからと言われた。眠たくてまぶたが落ちていきそうになりながらも、思っていることを今日伝えなければ、またわたしは気持ちに蓋をしたままになる気がして、頭がカクンと落ちそうになると思いつき手の甲をつねった。痛みが走ると少しだけ目が冁えた。

お母さんが帰ってきたのは結局十一時を過ぎた頃だった。今日はコンビニの袋は持っていないくて、帰ってくる途中でおにぎりを食べたとくたくたに疲れた様子で言った。

「アイが先にご飯食べてくれてて助かった」

そう言ってリビングの床に足を投げ、仰向けに寝転がったお母さんのそばに近寄り、少し話があるのと重たい頭をどうにか支えて告げた。なあに？ と視線がこちらに向くと頭の中で何度も繰り返し返していた言葉が胃のあたりで詰まってしまい、無言でアルバムを差し出した。

懐かしいね、と言って手にとったお母さんはAとうつ伏せに姿勢を変えて、ページをめくっていく。
「どうして急に出してきたの？」

「わたしね、留守番してる時にこのアルバムをよく見てるの」
肯きながらページはBとめくられていく。写真の中の満面の笑みの自分と目があつた。

④ お母さんともつと写真が撮りたい」

勢いに任せてそう言うのと、わたしの決意の一言とは裏腹にお母さんはCとした顔をしながら、瞳は疲れからかとうんとしていた。

「昔は桜の下で家族写真を撮ってたでしょ。でもお父さんと離れて暮らすようになってから、それがなくなっちゃって。お母さんも忙しくなつて、写真を撮る機会も減っちゃったから」

お母さんの手元からアルバムを取り、一番最後の写真を見せた。それは五年生のクラス写真だけのページだ。

「去年の写真はこれだけ。お母さんがわたしのこと※蔑ろにしていると思わないけど、携帯でもいいから一緒に写真を撮って欲しい。昔みたいに今の家族をちゃんと思い出として残したいの」

わたしの手からそつとアルバムを抜き取ると、お母さんはしつとりとした声でごめんねと言った。

「お母さん忙しくて気付いてあげられなくて」

「お父さんもお母さんも忙しいのわかってる。だけど写真一枚撮るくらいのがままなら許してもらえてるでしょ？」

「ぜんぜんわがままじゃないよ。いつも我慢させてごめんね」
おいでと言われて、わたしは横になったお母さんの腕の中に滑り込んだ。こんなふうと一緒に横になったのもいつぶりだろう。毎日おやすみなさいのハグをしているけれど、それよりももっと近く、強くお母さんを感じた。ゆっくりと髪を撫でられると、それだけで全身の力がふーっと抜けて本当はまだ子供でいたいと、ようやく分かった。赤ちゃんの時に戻ったようなやすらぎが全身を満たしていく。

「毎日寂しい？」

わたしは正直に肯いた。じんわりと涙が滲んで、それを悟られないようにしたけれど、Dと溢れ出してきた滴はお母さんのシャツの胸の部分に吸い込まれるように染み込んでいく。

「ごめんね。アイはまだ十一歳だもんね」

首を横に振ると、我慢しなくていいのよ、とわたしの気持ちが伝わったかのように、優しい声が降ってきた。

「写真、撮ろうね。約束する」

お母さんはゆっくりゆっくりと髪の毛を撫でてくれる。こんなに髪の毛伸びてたか、と言いながら、ゆっくりゆっくりと、そうされていると髪の毛の先から眠気が全身を包んで、お母さんの腕の中でまぶたを閉じてしまった。耳元では昔歌ってくれていた童謡がうすぼんやりと聞こえた。

※（文中のことばの意味）

（ 松井玲奈 『家族写真』 ）

戯けて：…わざとおもしろおかしく振る舞ったりすること。
蔑ろ：…物事や人を軽んじたりすること。

問 1 ——— 線① 「わたしは早く授業が始まって宿題が出れば

いいのにと思っていた」とありますが、なぜですか。文中から十四字でぬき出しなさい。

問 2

——— 線② 「自分の底から湧き上がってくる感情に無理やり蓋をする」とありますが、この時の「アイ」の心情を「エリサ」との会話の中ではどのような熟語で表現されていますか。文中から漢字二字でぬき出しなさい。

問 3

——— 線③ 「わたしはゆっくりとひとつ肯いた」とありますが、この時の「アイ」の心情として、最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 尊敬 イ 断念 ウ 混乱 エ 納得

問 4

——— 線④ 「お母さんともっと写真が撮りたい」とありますが、この時の「アイ」の心情として、最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア お母さんとの二人っきりの思い出を大切に残したいという気持ち。

イ 昔のように今の家族をきちんと思い出として残したいという気持ち。

ウ たくさん撮ってエリサの家の玄関の写真の数を超えたいという気持ち。

エ お父さんにお母さんとのツーショット写真を何枚も送りたいという気持ち。

問 5

A D にあてはまることばとして、ふさわしいものを次の中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア ポロポロ イ パラパラ
ウ ゴロン エ キョトン

問6 本文の内容としてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア この物語は、友人「エリサ」と母親の心情の変化をうまく織り交ぜながら描かれている。「アイ」は毎年、家の前の桜の下で撮っていた家族写真を思い出しながらアルバムを見返している。

イ この物語は、主人公「アイ」と友人「エリサ」の友情が深まる様子が描かれている。「エリサ」の言葉をきっかけに「アイ」はアルバムを見返しながら過去の思い出に浸っている。

ウ この物語は、主人公「アイ」の一人称で描かれている。「アイ」は共働きの両親を困らせたくないと思いつつも、まだ甘えたいと揺れ動く気持ちの中でいつもアルバムを見返している。

エ この物語は、主人公「アイ」を中心にしつつも場面ごとに登場人物の視点で描かれている。両親を困らせたくないと思いい、わがままを言わず我慢している「アイ」を客観的に捉えている。

三 次のことばに関する各問いに答えなさい。

問1 次の——線と同じ意味・用法のものをあとから一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

① 今年の夏は暑くなるそうだ。

ア くやしくて涙が出そうだ。

イ 飛行機の到着時間が遅れるそうだ。

ウ 祝勝会で兄はともうれしそうだ。

エ さらに物価が上がりそうだ。

② 朝の空気はとても新鮮だ。

ア 君に必要なのはほんの少しの勇気だ。

イ 空は雲一つない快晴だ。

ウ 電車を乗るのには案外不便だ。

エ 面白いアイデアが心に浮かんだだ。

③ ぼくは泳ぐのが得意だ。

ア 日差しが強い一日だ。

イ 昨年の夏休みには沖繩に行きましただ。

ウ 母の作ったおにぎりはおいしいだ。

エ 弟も走るのはいやい方だ。

④ 明日は晴れるでしょうと天気予報士が言っていただ。

ア 明日から早起きをしようと決心しただ。

イ どんなに苦しくろうとあきらめてはいけないだ。

ウ 友達と映画を見に行っただ。

エ 君がいつしよに行ってくれと安心だ。

⑤ 自分のことばかり考えているだ。

ア わからない問題が、まだ三題ばかりあるだ。

イ ご飯を、五杯ばかり食べただ。

ウ 朝からテレビばかり見ているだ。

エ 今駅に着いたばかりだ。

問2 次の四字熟語を例にならって、正しく書きかえなさい。

誤 板
↓
正 万

- 例 森羅板象（しんらばんしょう）
① 取捨選択（しゅしやせんたく）
② 大機晩成（たいきばんせい）
③ 大動小異（だいどうしょうい）
④ 異句同音（いくどうおん）
⑤ 朝礼暮改（ちようれいぼかい）

問3 次の慣用句の□にあてはまる体に関する語をあとから一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ① □をおしむ（苦勞をいやがる）
② □をおどらせる（期待や興奮などで心がわくわくする）
③ □をそろえる（必要なお金を全額用意する）
④ □がうく（わざとらしいお世辞などを聞いて不快に思う）
⑤ □がかたい（軽々しく話さない）
ア 歯 イ 首 ウ 耳 エ 目 オ 胸
カ 腹 キ 骨 ク 口

四 次の——線のカタカナは漢字に直し、漢字は読みを答えなさい。

- ① 先生はやさしいクチヨウで話した。
② 手間をハブいて調理する。
③ 時間まで教室でタイキする。
④ 習い事の月謝をオサめる。
⑤ 足もとをライトでテラす。
⑥ せき止めによく効ク薬。
⑦ 祖父が畑を耕ハす。
⑧ トラックで砂利リを運ぶ。
⑨ 赤く熟ジュれたトマト。
⑩ 悪いことをしたら潔ケツく謝る。

これで問題は終わります。